

『潮州峯歌集』*序

民国三年一月わたしは『紹興県教育月刊』に次のような声明を發表した。

「作人いま児歌童話を採集し、録して一編となし、越国の土風の特徴を存し、民俗研究・児童教育の資料とせんと欲す。即ち大人がこれを読むも、天籟を聞くが如く、懐旧の思いを起し、児時に釣遊せし故地、風雨の異なる時、朋侪の嬉戯、母姉の話言、猶景象の宛かも在るがごとく、顔色親しむべきも、亦一樂なり。第茲れ事体繁重にして、一人の才力の能く及ぶ所にあらず、尚希わくば、当世方聞の士の、その知る所を挙げて、曲げて教益賜わり、以て成るあるを得ば、実に大幸となさん。」

一年を収集の期間と定めたが、年末になっても、全部でたった一件の投稿しか得られなかった。その頃はみんなまだこうしたものに注意せず、成績不良も怪しむにたりない。わたし自身が独力で収集するしかなかった。そこで見聞したものを次々と記録して行き、全部で児歌二百章ほどを集めたが、草稿はいまに至るまで引き出しの中に入れてままだ。民国六年四月北京に来て、北京大学の友人が歌謡の収集を開始したので、わたしもくっついて手助けをしたが、怠惰のため、ついに自分の草稿も整理できなかった。だが劉半農・常維鈞の諸君の努力によって、この運動はとても発展を遂げ、収集の成績もよかったばかりか、個人の輯録した地方歌謡集もいくつも完成した。顧頡剛、常維鈞、劉経庵、白啓明、鍾敬文諸君が編んだものなどみなそうである。この林培廬君の『峯歌集』はすなわちその中の最も新しい一種である。

歌謡は民族の文学である。これは一民族が無意識にした全心の表現であるが、個人の意識と民族の意識が同じように発展した時代にならないと完全な理解と尊重は得られない。中国は今そういう時か？あるものはそうであり、あるものはそうでない。中国の革命はなお未だ成功せず、今でも進行中であるから、理屈から言えば民族自覚の時代であるはずである。しかし中国に欠けているものは、徹底した個人主義である、利己的な本能はたつぷりあるけれども。したがって本当の国家主義は発生するはずがなく、文芸上も虚しく民衆文学を提唱するばかりで、実際には国民文学は全く希望がない。こんな時勢に、社会には流行りものが充満している。まさしくたちまち頽廢するかと思えば、たちまち血涙を振り絞るように、たちまち歌謡だとばかりに歓迎されるかもしれない。だがそれは宛にならない。〔歌謡を〕改変しようとするばかりか、真の鑑賞でもない。歌謡を蒐集する人はこの際多くの報酬を望むことはできない。ただその嗜好あるいは趣味の仕事として、孤独に一人でやるしかない。またあるいは小太鼓を叩いて古物を買う人や、塵土の中から“こまごました”物件を掘り出し、屋台に並べ、目利きの選択に供する者のように、——もし売れなければ、いつまでも店頭において飾りとしてもよい。この点に関しては、たいていいま歌謡を蒐集している人は誰でも覚悟している。わたしの知っている何人かの十に九はそうである。ほとんどが誠実質朴で、一意専心この事に打ち込んでいる。そして林君の堅忍卓絶などはとりわけ佩服すべきものだ。だが今この忙しい世界で、わたしは林君の苦勞には佩服し、この歌集

が価値あることを承認するけれども、少なくともこの聖道戦争の何年かの中で、これがどのようにして国人の理解するところになり得るかは、保証する事はできない。——将来の学術文芸界に対する貢献はどうあろうと間違いないけれども。

中華民國十六年四月三日、北京にて記す。

※初出：1927年4月『語絲』第126期

* 『潮州^{しほ}輦歌集』 未詳。『民国時期総書目』失収。輦はいまでは畚と書く。畚族は福建・浙江等に分布する少数民族。これはその民歌を集めた集。